

聖書箇所：ルカの福音書9章51～62節

説教題：御顔をまっすぐに向ける

1 サマリヤ人は受け入れなかったが

(1) サマリヤ人

イエスと弟子たちはこれまでガリラヤ地方を中心に活動してまいりました。しかし、51節以降からはがらっと様子が変わります。イエスはエルサレムに行くことを決心されません。

エルサレムに向かう道はいくつかありました。サマリヤ人の地方を通るルートが一つ。もうふひとつはヨルダン川沿いを南に向かうルート。どちらを通ってもよいはずなのですが、ユダヤ人たちはサマリヤ地方を通ることは避けて、ヨルダン川沿いを通るルートを選びました。わざわざそのようにする理由がありました。

サマリヤ人はモーセ五書だけを聖書とみなし、その地方にあるゲリジム山で礼拝しています。ユダヤ人にはそのことが気に入りません。「ダビデの神殿があるエルサレムでなぜ礼拝しないのか。」そのように言って、ユダヤ人はサマリヤ人とつきあうことを極端に嫌っていました。ですからサマリヤ人から見ればエルサレムという町は憎しみの対象になってしまうのです。そんな所へわざわざ、「御顔をエルサレムに向けて進んで」行くのですから、サマリヤ人がイエスのことを快く受け入れるはずはありません。

(2) 主の御思い

そんなサマリヤ人の態度を見て、弟子たちは腹が立っていました。54、55節。「主よ。私た

ちが天から火を呼び下して、彼らを焼き滅ぼしましょうか。」しかし、イエスは振り向いて、彼らを戒められた。」イエスの態度に注目してください。イエスの御顔はずっとエルサレムの方向を向き続けていましたが、ここでイエスは振り向きません。振り向かなければならないほどの大きな問題があったからです。何か問題だったのでしょう。ヤコブとヨハネが口にしたことば。「この町を滅ぼしてしましましょう。」このことばをイエスは見過ごすことができません。「ふたりを戒められた」とあります。厳しくしかったと言うほどの意味です。どうしてイエスはこのような厳しい態度を取られたのでしょうか。そもそもどうしてわざわざサマリヤ人の町に行かれたのか。イエスは何を考慮しておられたのか。そのことはまた最後のところで触れていきたいと思えます。

2 イエスについて行くのであれば

(1) 枕するところもない：イエスはこの世から追い出され殺される

イエスは、エルサレムに向かう道の途上でいろいろな人に出会っていきます。今日の箇所では三人のことが取りあげられています。皆さんここを読んでどう思われましたか。イエスについて行くことは非常に厳しいことだと感じるのではないですか。いつも言うようですが、厳しく見える所に恵みがたくさんあります。一つ一つ見ていきます。

まず一人目のケースから。57節。「私はあ

あなたのおいでになる所なら、どこにでもついて行きます。」これに対してイエスは、「狐には穴があり、空には鳥の巣があるが、人の子には枕する所ありません」と答えます。

「人の子」とはイエスご自身のことを指します。狐にも鳥にも帰る家はあるのに、救い主イエスには帰る家がないと言っています。もっとつきつめれば、地上にはイエスの帰るべき家がないと言っています。この世から追い出されていくからです。つまり殺されることを意味します。

素直な方は思うでしょう。「イエスについて行きます。」実は大変なことでした。もし本当にイエスについて行くというのなら、あなたはイエスとともにこの地上から追い出されていくことになる。それでもよいのか。イエスはそう問いかけておられます。

(2) 死人たちを葬らせなさい：イエスは死からよみがえっていく

続いて二人目のケース。59, 60 節。イエスは「わたしについて来なさい」と言われます。言われた相手は、そのとき父親を亡くしたばかりだったらしくこう言います。「まず行って、私の父を葬ることを許してください。」

私がこの人であれば、おなじ事を言います。皆さんもそうでしょう。ところがイエスの答えは意外なものです。「死人たちに彼らの中の死人たちを葬らせなさい。あなたは出て行って、神の国を言い広めなさい。」

「父親の葬式のことなど放っておけ。伝道が大事だ。」そんな意味に聞こえなくもありません。もし本当にそのような意味で語ったのなら、私はついて行けません。

もちろんそんなはずはない。イエスは人が

死ぬことを悲しまない方ですか？そうではないでしょう。ラザロが死んで墓に葬られたとき、イエスは涙を流されました。やもめのひとり息子が死んで墓に葬られようとしたときも、涙を流した。死んだ者は関係ないと言っているのではない。むしろ逆です。

ここで言われていることは、先ほどの最初のケースもそうですがみなイエスと関係があります。イエスは御顔をまっすぐにエルサレムに向けておられます。そこで十字架のさばきを受けられ、死のうとされています。ご自分が死人となり墓に葬られていきます。もしそこで終わったのなら、私たちには何の希望もなかったでしょう。でも、私たちは知っています。この方は三日目に死からよみがえられました。私たちの信仰の土台がここにあります。パウロは言っています。「もしキリストがよみがえらなかったのなら、あなたがたの信仰はむなし。」(第一コリント 15 章 17 節)

父親の葬式など意味がないと言っているわけではありません。亡くなったあなたの父親を死から取り戻すために、わたしイエスはエルサレムに向かっていく。そこで死んでいく。そうしてすべての救いのみわぎを成し遂げていく。そのとき神の国はあなたのところにもやって来る。やがてその事に気がついたら、あなたは神の国を伝えていきなさい。それがこの箇所の意味になります。

(3) うしろをふり向けない：もう後戻りできない

三番目のケース。61, 62 節です。「主よ。あなたに従います。ただその前に、家の者にいとまごいに帰らせてください。」これから長い旅になるので、家族の者にお別れの言葉

を伝えたい。これも実に当たり前のことでしょう。

ところがここでもイエスの答えは意外なものでした。「だれでも、手を鋤にかけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくありません。」現代風に言い直せばこうなるでしょう。「車を走らせて目的地に向かっていく途中で忘れ物を取るために戻るとはひどく時間のロスです。そんな人は運転手にはふさわしくありません。」

イエスに従う者は、家族に別れの挨拶をしてはならない、というのでしょうか。そんなはずはない。これまで二つのパターンを見てきて、共通点があることに気がついたと思います。これも、イエスご自身のことなのです。イエスは神の国をもたらすためにエルサレムに向かっておられます。たとえて言えばスイッチが押されてしまったのです。スイッチを押した後であの人に挨拶をしていないことを思い出したので、スイッチを解除してくれ。その間に家に戻るから。そう思っても後戻りはできません。このスイッチは一度押されたら、絶対に解除できないのです。

イエスは、エルサレムに御顔をまっすぐに向けられています。スイッチが押されてしまった以上、進むしかありません。後戻りすることは絶対にできません。どんなに途中で後悔しようとも、途中で迷いが生じたとしても、もう止めることはできません。

ロンドンオリンピックが始まる前、開催まで後何日あるかを示す大きな掲示板が飾られていました。カウントダウンと言って、一日ごとに数字が減っていきます。それと同じように、イエスの十字架まであと何日か。カウントダウンが始まっているのです。イエスでさえ止めることはできません。その数字が

ゼロとなる日を目指して、イエスはエルサレムに進んでいきます。

### 3 主を受け入れない者をも救うために

こうして三つのケースを見て参りました。最初はなんだかわかりにくく、イエスに従うには大変な決心が必要なのかと戸惑いました。でも、すべてイエスが十字架に向かわれる決心の強さと関係していたことがわかりいただけだと思います。

イエスはこの地上から追い出され、殺されていきます。イエスは罪によって死に定められた私たちを救い出すために、死からよみがえっていかれます。十字架に向かうことはイエスにとって最も大きな苦しみでした。でもイエスは後戻りできません。一度スイッチが押されたらだれもそれを解除できない。わざわざそのようにして、逃げ道をふさいでいきます。

いったいなぜ主はそこまでされるのでしょうか。イエスがわざわざサマリア人の町に行かれたのはどうしてか、その問題を脇に置いたままでした。

弟子たちは、イエスを受け入れない頑なサマリア人に腹を立てました。しかしイエスは振り向き、弟子たちを厳しくしかりつけました。主の御思いは弟子たちとまったく違います。イエスはこのサマリア人を救おうとされています。イエスは頑ななサマリア人のためにもいのちを捨てようと覚悟されています。その決心の強さが、「イエスは、エルサレムに行こうとして御顔をまっすぐに向けられた」という表現に込められています。

このことは私たちにとってどのような恵みとなるのでしょうか。私たちはどこかで思っていないでしたか。まず自分が信じないと

いけない。信じたら、初めて主は私のためにいのちを捨ててくださる。なにか努力をしたらそのご褒美がもらえるという、そんな順番です。とにかく信仰が先だと思っていました。

しかし今日の箇所には何が書かれているか。たとえ今主を受け入れることがなくても、主は先に私たちの救いのためにいのちを捨て、救ってくださっている。私たちが主を知らずと以前に、私たちが信じるはるか以前に、主のほうから先に私たちのために死んでくださっている。

そのためには、主はわざわざ逃げ道をふさいでしまいます。絶対に十字架から逃れられないよう、わざわざ厳しい道を通られます。なぜそこまでされるのでしょうか。救いから漏れるものはひとりとしてあってはならないのです。そのためにはあらゆることをする。それが私たちの主がしてくださったことです。

主の御栄光を仰ぎ見たいと願います。